

Y08b

小惑星探査機はやぶさの地球帰還時のインターネット中継とその反響

吉住千亜紀、尾久土正己、佐藤奈穂子、加藤久美 (和歌山大学)

2010年6月13日、日本の小惑星探査機はやぶさは、打ち上げから7年の歳月を経て地球帰還を果たした。その間、数多くのトラブルに見舞われながらもそれを乗り越えてきたはやぶさのミッションは、プラネタリウム番組やDVD（筆者は2005年にプラネタリウム番組「ボクノチイサナオホシサマ」(あすたむらんど徳島で放映)を制作、2007年にJAXAのDVD「祈り～小惑星探査機はやぶさの物語～」の制作に参加)でも広く紹介され、一般市民からの期待や支持を集めていた。

地球帰還に際して、当初の計画では回収カプセルのみを地球に落下させる予定だったが、最終的にははやぶさ本体も大気に突入し燃え尽きることが発表された。しかし落下予定地点はオーストラリアの立入制限地域で、多くの市民にとって観測は困難であると思われた。そこで我々は流星となって輝くはやぶさの撮影及び生中継を計画し、場所はJAXAから光跡予想が発表されていたGlendambo周辺とすることにした。

中継には、超高感度デジタルカメラの動画撮影モードを使用し、その映像を動画配信サイトのUstreamで公開する形で実施したが、我々が準備した中継サイトは前日の通信テストから非常に多くのアクセスがあった。UstreamはTwitter機能も備えており、中継中はコメントも読めない速さで書き込まれていた。現在までに、視聴者の数は生中継63万人、録画54万人となっており、また中継直後には、我々の所属する大学・研究所へ直接、多数のメールをいただいた。

本講演では、中継の概要及びその反響について紹介する。